

今昔物語集(一)

全訳注

国東文麿



講談社学術文庫

## 今昔物語集(一)

国東文麿（くにさき ふみまろ）

1916年生れ。1940年早稲田大学文学部（旧）  
卒業。日本文学専攻。現在、早稲田大学教授  
（文学部）。著書「今昔物語集成立考」その他。



定価 380 円

---

## 今昔物語集(一)

国東文麿

昭和54年1月10日 第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話・東京(03)945-1111(大代表)

振替・東京8-3930

装 幀 蟹江征治

レイアウト 志賀紀子

印 刷 廣済堂印刷株式会社

製 本 有限会社中沢製本

© Fumimaro Kunisaki 1979  
Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

---

0193-583051-2253(0)

( 衛 E )

## 今昔物語集(一)



## まえがき

古来、わが国で全世界を意味する三国、すなわち天竺・震旦・本朝（印度・中国・日本）の説話千数十話を三十一卷（うち第八・十八・二十一卷を欠く）に分けて抱え込み、量的にも、内容の多様さにおいても、また文学的興趣においても、わが国の多くの説話集中群を抜く独自の存在として高く評価されている『今昔物語集』は、十二世紀の初頭、平安末、院政中期のころの成立と推定されているが、その撰者とともに著作意図・成立事情などについては深い謎に包まれて、いまだ明確にされていないのが現状である。

ところで本集は類聚説話集であつて、分類された説話は一定の理念のもとに整然と、かつ重層的に組織化されていて、一大建造物さながらのきわめて構築性の強い説話集になっている。その概要をいえば、まず全巻が天竺・震旦・本朝の三部に大きく分けられていて、巻一―巻五が天竺説話、巻六―巻十が震旦説話、巻十一―巻三十一が本朝説話となっており、一方また全巻がいわゆる仏教説話の巻と世俗説話の巻に二分される。巻一―巻五（天竺）・巻六―巻九（震旦）・巻十一―巻二十（本朝）が仏教説話の諸巻であり、巻十（震旦）・巻二十二―巻三

十一（本朝）が世俗説話の諸卷である。仏教説話諸卷においては、天竺・震旦・本朝のいずれも、はじめの部分にその国の仏教の発生と展開を述べる形においていくつかの説話を配置し、いわば説話による三国それぞれの仏教史を意図しているようである（天竺部は巻一第一話から第八話まで、震旦部は巻六第一話から第十話まで、本朝部は巻十一第一話から巻十二第十話まで）。つぎに三宝（仏・法・僧）靈驗説話を配置する。そのはじめは仏ないし仏像靈驗説話で（天竺部は巻一第九話から巻一末話まで、震旦部は巻六第十一話から第三十話まで、本朝部は巻十二第十一話から第二十四話まで）、つぎは法宝靈驗説話。これは天竺部においては釈尊の説法説話を当てるが（巻二全話）、震旦部・本朝部では諸經典の靈驗説話である。そしてその經典は主として天台五時教の順に従って説話配列を試みている（震旦部は巻六第三十一話から巻七末話まで、本朝部は巻十二第二十五話から巻十三、巻十四を通して巻十五の末話まで）。ただし本朝部は本集成立期におけるわが国の仏教事情を反映して、法華經靈驗説話を他の諸經靈驗説話に優先させ、その数も多くなっており、また浄土往生説話は弥陀關係の法宝靈驗説話と捉え、巻十五の一卷をそれに当てている）。法宝靈驗説話のつぎには僧宝靈驗説話を配置する。僧宝は天竺部にあつては仏弟子・羅漢等であり（巻三全話）、震旦部・本朝部では觀音・地藏等の菩薩および諸天である（震旦部巻八は欠卷であるが、これら菩薩・諸天の靈驗説話が収められるはずの卷であり、本朝部は巻十六が觀音靈驗説話、巻十七が地藏その他の靈驗説話を収めている）。三宝靈驗説話のあとには因果応報説話を中心とする仏教

教訓説話が配置される。天竺部においては巻四・巻五がそれに当たると思われ、震旦部では巻九、本朝部では巻十九・巻二十が該当する。

以上の仏教説話諸巻の組織に対し、世俗説話諸巻はどのようなになっているか。世俗説話は前記のように、震旦部の最終巻、巻十と本朝部の巻二十二から巻三十一までの十巻である。まず、本朝部から各巻の内容を略示してみよう。本朝部の世俗説話は本来は巻二十一からはじまるものと推定されるが、この巻は欠巻となっている。欠巻となった理由はともかく、この巻は皇室（天皇）関係説話が収められるはずの巻と考えられている。巻二十二は藤原鎌足以下藤原氏歴代の主要人物の逸話が列伝的に並べられており、巻二十三は主として僧俗、相撲人などの剛力談が収められ、巻二十四は工芸・医術・陰陽・管弦・詩・歌などの芸能名譽・名人談、巻二十五は主として源平武人の武勇・合戦談、巻二十六は主として地方民衆にかかわる不思議な運命談（宿報談）が集められ、巻二十七は霊鬼・狐・野猪による怪異談、巻二十八は貴賤僧俗にかかわる滑稽諧謔談、巻二十九は盜賊談を中心において、種々の犯罪談や動物相闘談を収める。巻三十は恋愛歌話や和歌伝説を集めており、巻三十一は以上の各巻に入らない雑多な奇聞、口碑伝承談を収める。

本朝世俗説話各巻の内容はおおむね右のようになっているが、その全体を通観すると、巻二十二～巻二十五の四巻は主として各説話の主人公の人物の行為性情などを賛美するものとなっており、巻二十六～巻三十一の六巻は多く各説話の主人公の人物の行為性情によせて何



らかの処世訓を述べるものとなっている。ところで、もし本朝世俗説話の冒頭の巻二十一（欠巻）が皇室関係説話を集めようとしたもので、それによって本朝の歴史（皇室史）を意図しようとするものであれば、本朝世俗説話は、歴史（巻二十一）・人物賞賛（巻二十二・巻二十五）・処世教訓（巻二十六・巻三十一）の巻配列となり、前記仏教説話における三国それぞれの配列が、仏教史・三宝靈驗（三宝賞賛）・因果応報（仏教教訓）の順序となっているのに対応せしめたものと考えてよいであろう。さてその上に立つての巻二十一から巻三十一までの配列（巻序）については、本集独自の社会意識・文化意識などが強く働いているものと思われるが、その詳細については今は触れないでおこう。震旦（しんたん）の世俗説話は巻十の一卷にすぎないが、その一巻の中の説話配列には本朝世俗説話諸巻の配列に準ずるものが見いだせる。かようなことから、世俗説話全体の組織は大きくは仏教説話の組織と対応し、その一方で社会・文化面からのある世俗的基準による組織を試みているようである。

ともあれ、『今昔物語集』全巻は確然とした宗教的・処世的教導意識と社会的・文化的意識のもとに整然と組織化された作品であって、単に文学作品としてのみ捉えるべきでなく、撰集に当たっては何らかの現実的目的をもつて企画された作品であると考えてよからう。

以上の組織の問題と並んで注目すべき現象は個々の説話の配列方法である。筆者はこれを二話一類様式と名づけたが、それを簡単に説明すると次のようである。本集各巻中の説話は第一話から二話ずつが、主題とか話の内容をなす、あるできごととかの類似によって一括さ

れて並べられている。そして、一括された二話どうしについてみると、前に置かれた二話のあとの話と、次に置かれた二話の前の話との間にも何らかの関連事項があり、言い換えれば、強い類似によって一括された二話が、些少な関連を求めて次の二話に結びつきながら、つぎつぎに展開しているという、いわば連鎖的展開方法をとっているのである。二話の一括が例外的に三話の一括になっている個所も全巻中にはある程度存在するが、大部分は二話一括の連鎖的展開方法をとっており、これが執拗なまでに徹底的に行なわれている。『今昔物語集』の収載説話のほとんどは『今昔物語集』に先行する内外の説話集その他の書を出典に仰いでいると思われるが、そういう先行書から『今昔物語集』撰者が前記の組織に合わせつつ、一方で二話一類の説話配列をも満足するように説話を選出し、しかもそのすべてを『今昔物語集』独自の表現形式に統一していった作業はまさに驚異に値するといわねばならない。これを遂行し得た撰者はいったいだれなのか。また何のためにこのような困難にあえて立ち向かったのか。それらはまだ明確にされていない。撰者はかつては源隆国とされていた。しかし現在では種々の点から否定意見が強く出されている。『今昔物語集』がきわめて整然と組織化された一大類聚説話集であるからには、本来ならば堂々とした序文を具えていて然るべきである。それさえあれば、撰者も成立事情もおのずから明らかにされていたであろう。それがないのは本集の流伝過程に欠落したものであるうか。いや、そうは考えられない。現在伝わる古本系諸本の本文を検討していくと、本集が結局未完成のままに終わった作品であることを

推測させる。そのため、序文も書かれることなく放置されたもののようである。

『今昔物語集』が、あらかじめ前記のような組織をもった説話集を企図し、収載する説話を内外の先行書に求めようとする、いわば形式性の強い、硬い姿勢において作られた作品であるに於ては、この説話集には文学的にすぐれた説話を多く抱え持っている。その理由の一つは、それら説話がたとえ先行書を出典としたものであつても、かつてそれが口誦くそうされたものであれば、その折に獲得された、口誦説話独得の文学性を先行書を通じて継承しているからであり、また一つは、撰者のもつ生なまの人間および人間性に対する興味、この世のさまざまなできごとに対する豊かな関心が、それに応ずる内容をもった説話を、組織と配列の規制の中で、より積極的を選びとり、独自の表現化を行なっているからである。芥川竜之介が『今昔物語集』説話の文学性を野性的な美しさと捉とらえたが、それがすべてではないにせよ、喜怒哀楽の人の世、善悪美醜、賢くもあり愚かしくもある人間存在に対する撰者の飽あくことの無い興味が、『今昔物語集』という大説話集を総じてはたくましい写実文学的作品たらしめているといえよう。

『今昔物語集』ははじめにふれたように、院政中期の成立（未完）と考えられているが、以後近世初頭に至るまであまり多くの人の目にふれることがなかった。それには、あるいは成立事情の謎がからんでいるのかもしれない。が、それはともかく、このために伝承系統の複雑さはなく、古本といわれる数種の写本も、すべて鎌倉中期に書写されたと推定される鈴鹿

本と称する一本に遡<sup>そ</sup>及<sup>きう</sup>されるといわれている。そのこともあり、また作品が古来文学史上輕視された説話集であるということもあつて、作品研究の歴史は淺く、文学的・文献学的・考証学的・国語学的等の諸方面よりする本格的の研究となると緒についたばかりであるといつていい。本書の上梓も他の著名な古典に比べて少なく、近代以降も數種にすぎない。近年に至つて頭注を施したものがあいついで上梓されているが、一、二を除いてはおおむね本朝諸卷（第十一卷以下）に限られている。現代語訳も一、二あるが、これも本朝諸卷だけである。

本文庫では、天竺・震旦・本朝の全卷にわたつて、一話ごとに本文・現代語訳・語釈を試みた。本文は底本として基本的には実践女子大学蔵本（黒川家旧蔵）を用いたが、諸古写本と同様、これにも独自の欠けた卷があり、文字・語句の誤脱も指摘できるので、鈴鹿本その他を参照して補い改めた。現代語訳は本文に即して行ない、『今昔物語集』説話の文体の味わいのできるだけ残すようにつとめ、語釈は各説話内容をよりよく理解させるため、事物の説明に意を用い、国語学的方面からの細説は略した。各説話の終わりに付した参考欄は鑑賞や理解に資するためのその説話の要旨、組織上の位置、社会・文化的意味、文学的評価、他説話集やその他の書との関連などに簡単にふれることにした。

# 目次

まえがき……………3

凡例……………25

## (一) 卷一

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| 釈迦如来、人界に宿り給へる語、第一……………       | 29  |
| 釈迦如来、人界に生れ給へる語、第二……………       | 40  |
| 悉達太子、城に在りて樂を受けたまふ語、第三……………   | 57  |
| 悉達太子、城を出でて山に入りたまへる語、第四……………  | 77  |
| 悉達太子、山に於いて苦行したまへる語、第五……………   | 94  |
| 天魔、菩薩の成道を妨げむと擬る語、第六……………     | 108 |
| 菩薩、樹下に成道したまへる語、第七……………       | 119 |
| 釈迦、五人の比丘の為に法を説きたまへる語、第八…………… | 123 |

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| 舍利弗、外道と術を競べたる語、第九             | 127 |
| 提婆達多、仏と諍ひ奉れる語、第十              | 133 |
| 仏、婆羅門の城に入り、乞食したまへる語、第十一       | 140 |
| 仏、勝蜜外道の家に行きたまへる語、第十二          | 149 |
| 滿財長者の家に仏の行きたまへる語、第十三          | 155 |
| 仏、婆羅門の城に入りて、教化したまへる語、第十四      | 168 |
| 提何長者の子自然太子の語、第十五              | 172 |
| 鳶堀魔羅、仏の指を切れる語、第十六             | 178 |
| 仏、羅睺羅を迎へて出家せしめたまへる語、第十七       | 183 |
| 仏、難陀を教化して出家せしめたまへる語、第十八       | 194 |
| 仏の夷母橋曇弥、出家したまへる語、第十九          | 205 |
| 〔仏、耶輸多羅をして出家せしめたまへる語、第二十〕〔欠話〕 | 213 |
| 阿那律、跋提、出家せる語、第廿一              | 213 |
| 鞞羅羨王子、出家せる語、第廿二               | 220 |
| 仙道王、仏の所に詣りて出家せる語、第廿三          | 225 |
| 〔郁伽長者、仏の所に詣りて出家せる語、第廿四〕〔欠話〕   | 244 |

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| 和羅多、出家して仏の弟子と成れる語、第廿五    | 244 |
| 歳百廿に至りて始めて出家せし人の語、第廿六    | 252 |
| 翁、仏の所に詣りて出家せる語、第廿七       | 259 |
| 婆羅門、醉に依りて意ならず出家せる語、第廿八   | 266 |
| 波斯匿王、阿闍世王と合戦せる語、第廿九      | 268 |
| 帝釈、修羅と合戦せる語、第三十          | 276 |
| 須達長者、祇園精舎を造れる語、第卅一       | 279 |
| 舎衛国の勝義、施に依りて富貴を得たる語、第卅二  | 288 |
| 貧女、仏に糸を供養せる語、第卅三         | 296 |
| 長者の家の牛、仏を供養せる語、第卅四       | 298 |
| 舎衛城の人、伎樂を以て仏を供養せる語、第卅五   | 303 |
| 舎衛城の婆羅門、一逆仏を遠れる語、第卅六     | 305 |
| 財徳長者の幼子、仏を称して難を通れたる語、第卅七 | 308 |
| 舎衛国の五百の群賊の語、第卅八          | 311 |

《今昔物語集卷二》——以下、(二)

仏の御父淨飯王死にたまひし時の語、第一

仏、摩耶夫人の為に忉利天に昇りたまへる語、第二

仏、病める比丘の恩に報いたまへる語、第三

仏、卒堵婆を拝したまへる語、第四

仏、人の家に六日宿りしたまへる語、第五

老母、迦葉の教化に依りて、天に生れ恩を報ぜる語、第六

婢、迦旃延の教化に依りて、天に生れ恩を報ぜる語、第七

舍衛国の金天比丘の語、第八

舍衛城の宝天比丘の語、第九

舍衛城の金財比丘の語、第十

舍衛城の宝手比丘の語、第十一

王舍城の燈指比丘の語、第十二

舍衛城の叔離比丘の語、第十三

阿育王の女子の語、第十四

須達長者の蘇曼女、十卵を生ぜる語、第十五



天竺に香を焼きしに依りて口の香を得たる語、第十六

迦毗羅城の金色長者の語、第十七

金地国の王、仏の所に詣れる語、第十八

阿那律、天眼を得たる語、第十九

薄拘羅、善報を得たる語、第二十

天人、法を聞き法眼淨を得たる語、第二十一

常に天蓋を具せる人の語、第二十二

樹提伽長者の福報の語、第二十三

波斯匿王の娘善光女の語、第二十四

波羅奈国の大臣、子を願へる語、第二十五

前世に不殺生戒を持せる人、二国の王に生ぜる語、第二十六

天竺の神、鳩留長者の為に甘露を降らせたまへる語、第二十七

流離王、釈種を殺せる語、第二十八

舍衛国の群賊、迦留陀夷を殺せる語、第二十九

波斯匿王、毗舍離の卅二子を殺せる語、第三十

微妙比丘尼の語、第三十一

舍衛国の大臣師質の語、第三十二